

報告

2009 年度日本語力テスト実施報告

岸江信介¹ 仙波光明¹ 堤和博¹ 岡部修典² 清水勇吉² 坂東正康³ 村田真実³
 (徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部¹・徳島大学大学院総合科学教育部²・
 徳島大学大学院人間・自然環境研究科³)

(キーワード：日本語力、診断テスト、分析)

A Report on Implementation of a Japanese test in 2009

SINSUKE KISHIE¹, MITSUAKI SENBA¹, KAZUHIRO TSUTSUMI¹, SYUSUKE OKABE², YUKICHI SHIMIZU², MASAYASU BANDO³,
 MAMI MURATA³

(Institute of Socio Arts and Sciences, The University of Tokushima¹, Faculty of Integrated Arts and Sciences, The
 University of Tokushima², Graduate school of Human and Natural Environment Sciences³)

(Key words: Japanese Ability, Japanese test, Analysis)

1. はじめに

昨今、日本語の運用能力に対する国民の意識が高まりつつある。平成 19 年度から NPO 法人日本語検定委員会「日本語検定」が始まり、平成 21 年 6 月および 11 月に実施された検定では延べ 10 万人弱が受検した。この検定は、小学生から社会人までを対象としており、日本語の運用能力に必要な知識を問うもので日本語の総合力をチェックすることを目的の一つに掲げている。

国民全体の日本語力に変化の兆しがあるかどうかは不明だが、岸江ほか(2009)で触れたように、全国の大学生を対象にした日本語力テスト結果によると、大学生の日本語力は年々低下傾向にあり、高校生レベルの維持はおろか、中学生レベルにまで落ち込んでいる状況が報告(小野ほか 2005)された。これ以降、全国各地の大学では、学生の日本語力低下に対する危機感が高まり、日本語力をチェックするためのテストや、日本語力の基礎学力や日本語表現を担保するための授業を始めた大学も増えてつつある。徳島大学でも総合科学部が 2009 年度改組され、学科共通科目として、「日本語表現の基礎」を導入した。

2. 第 2 回日本語力テストの実施

昨年度に引き続き、今年度も 2009 年度も数学・理科の科目とともに全学科の新入生全員に対し入学直後のオリエンテーションの期間を利用して日

本語力テストを実施した。

今年度、2 度目となる実施結果では、全体的には顕著な差はみられなかったが、総合科学部の改組に伴う学科の再編成や新設学科の誕生によって昨年度の結果とは差が生じた。

日本語力の診断テストを実施した。各学科別の解答者数は表 1 のとおりである。

学科別解答者数

解答者総数: 1,323名			
総人: 105名	工機: 108名	工知: 81名	医栄: 49名
総社: 110名	工化: 83名	工光: 51名	医保: 124名
総総: 68名	工生: 60名	工(夜): 51名	歯: 55名
工建: 91名	工電: 99名	医医: 105名	薬: 83名

表 1

テスト問題のレベルは、高校卒業程度のものを選び、問題は東京書籍の許可を得て、石川ほか(2007)を利用した。日本語力テスト問題の構成は 6 種類のジャンルを設定し、問題数は全体で 30 問である。各ジャンルの内容を以下に示す。

問1 異字同訓(漢字)	6 問
問2 手紙文における敬意表現(敬語)	5 問
問3 基本動詞に対応する尊敬語(敬語)	3 問
問4 慣用表現 1(文章表現)	3 問
問5 文意に即した適切なことば(文章表現)	3 問
問6 慣用表現 2(文章表現) +意味	10 問
計	30 問

表 2

3. 日本語力テスト結果と分析一

まず、日本語力テスト解答者全体の「成績度数分布」を図1に示す。

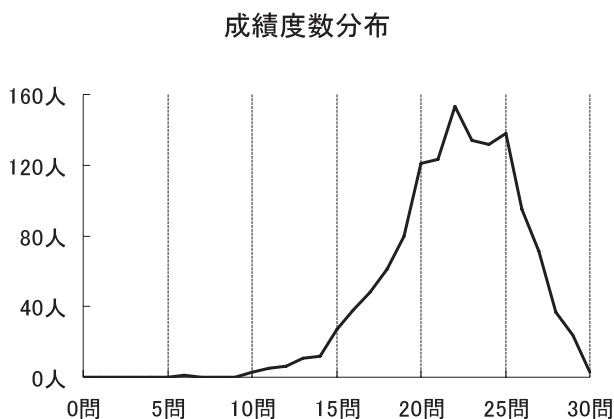


図1

高校卒業程度レベルとは70%以上の正答率をさしている(石川ほか2007)。図1の結果から、全体的なレベルとしては高校卒業程度の日本語力があるとみられる。

3-1. 文理比較

まず、文系・理系の観点から正答率について比較してみることにしたい。

総合科学部の人間社会学科・自然システム学科の2学科は、人間文化・社会創生・総合理数の3学科に改組された。文系を人間文化学科・社会創生学科とし、総合理数学科を含めた他学部のすべての学科を理系として扱う。

図2・3は、問1～6の正答率をグラフで表したものである。グラフの形としては、文理で大きな違いは見られないが、問5以外は文系の正答率が上回ったという結果は、前回と同様である。文理において開きが大きいのは問2・3であり、昨年と同様に、理系の学生は文系の学生よりも敬語の運用に問題があるようだ。無論、これもまた前回と同様に、文系の正答率よりも低い学科が多かったということも要因の一つであることを忘れてはならない。概ね文系が優位を示しているが、問5のみ理系がやや優勢となっている。他の問題においては文系2学科が上位にくるが、これに限っては学科別でも順位も中盤あたりにい

文系 (総人・総社)

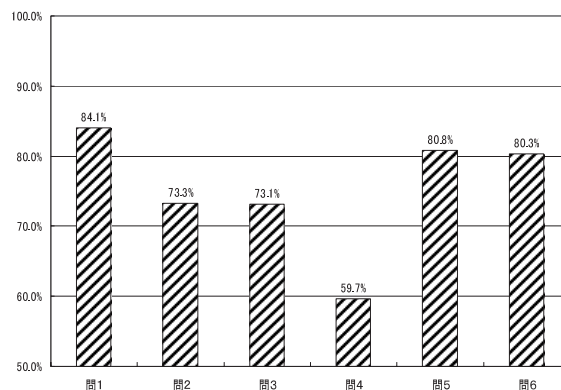


図2

理系 (総人・総社2学科以外)

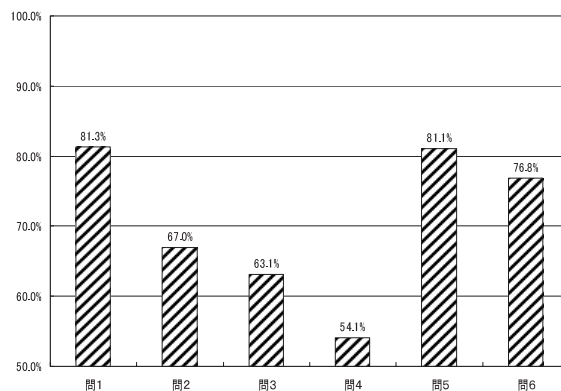


図3

る。文系も80%前後の正答率と決して低くないが、医歯薬の3学科および生物工学科・電気電子学科がそれ以上に良い成績であったため、理系の平均を引き上げている。

3-2. 問1 異字同訓の使い分け

異字同訓漢字を正しく使い分けられるかを確認する問題である。漢字とその字義の理解、そして問題文の文意を正しくつかむことが求められる。対象とする漢字は乱暴であるとかあらあらしい意の「荒」、おおざっぱであるという意の「粗」の漢字の組み合わせと、ひかえめにする意の「慎」、かしこまる意の「謹」の組み合わせである。

一問目について、アは金遣いがあらあらしい、イは人遣いが乱暴、ウは組み方がおおざっぱであるということになる。ア、イ、ウ三問合わせての平均の正答率は86.0%で、全体では昨年の84.6%

よりも若干高くなるという結果になった。図4は正答率の平均をグラフ化したものである。全体的に正答率の高いことがわかる一方で総合理数科、建設工学科の不出来が目立っている。すべての設問に正答したのは69.8%となった。昨年と同様に、特に正答率が低かったのはアの問いで、傾向としては正答率の高まりがみられるもののイ、ウなどと比較すると誤答しやすい問いであるようだ。他の二問よりも文意を読みとりにくかったのか、もしくは「金遣いがおおざっぱ」と誤って理解したため、「粗い」とする誤答が多かったのだと考えられる。

二問目についてそれぞれの文意は、アが飲酒を、さらにウはしゃべることをひかえることであり「慎」が正しく、イがかしこまって祝いの言葉を述べるという意味になり、「謹」が正しい。全体の平均は77.2%となり、図5をみてもわかるように一問目と比較すると全体的に誤答しやすいと言えるが、昨年の76.3%からは若干向上している。建設工学科と機械工学科については7割を切る正答率を示し、不出来であった。建設工学科については一問目においても最低の値である。三問すべてに正答したのは60.6%だった。イとウの正答率には1.4%ほどの差しかないのに対して、アに関しては7~8%落ちる。アとウの「つつしむ」には意味的な違いはほとんど無く、またその文意の平易さから考えると、文意を誤って理解したものとすると、漢字そのものとその字義の区別の理解が乏しいことによると考えるのが妥当であろう。正答率が9割を超えたのはイの問いの医学科のみだった。

3-3. 問2 敬語

問2は、目上の人に宛てた手紙の中で適切に尊敬語・謙譲語を使用し、正しく敬意を表現できるかを試す問題である。

解答者全体の正答率を見ると、五問中三問（ア、ウ、オ）は80%を超えており、ある程度の理解があると言える。しかし、残り二問（イ、エ）はそれぞれ39.8%、47.1%となっており、どちらも50%を割る低い数値となっている。さらに学科別に見てみると、イとエの二問について正答率が

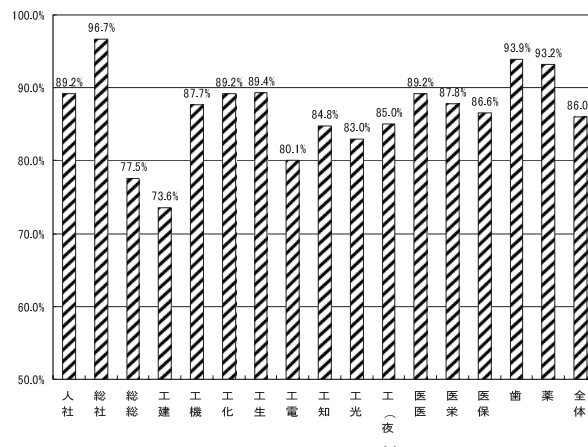


図4 問1-一の正答率

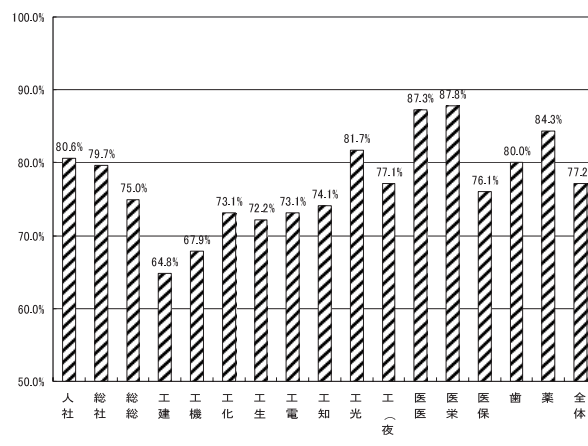


図5 問1-二の正答率

50%を超えたのは、人間文化学科（エ・62.9%）、医学科（エ・60.0%）、栄養学科（イ・61.2%、エ・53.1%）、歯学部（イ・52.7%）、薬学部（エ・57.8%）のみであり、その他の学科は50%に満たなかった。

内容から見える問題点について指摘する。正答率の低い問題イは、敬意を表す語を普通語に言い添える表現形式について、どれが正しいかを選択する問題である。正解は「ご出席くださる」だが、「ご出席される」「ご出席になられる」と解答する学生が少なくなかった。誤用の内、前者は謙譲語「ご～する」に尊敬の助動詞が接続した形、後者は尊敬語「ご～になる」に尊敬の助動詞が接続した形であり、どちらも二重敬語となっている。問題エは「おっしゃっ(て)」という選択肢を選ぶべきところであるが、「おっしゃられ(て)」を選ぶ

学生の方が正解者の数を上回った。この誤用は尊敬語「おっしゃる」に尊敬の助動詞が接続した形であり、これも二重敬語である。

問2の結果から、二重敬語に対する理解に乏しいことが敬語の誤用を生んでいると指摘できる。

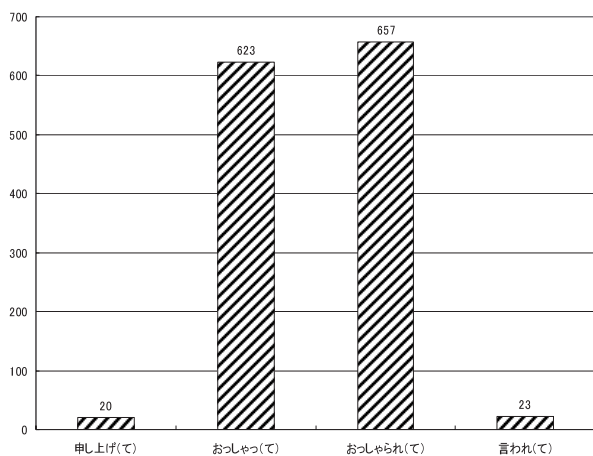


図6 問2-Eの正答率

3-4. 問3 基本的な動詞に対応する尊敬語

問3は、基本的な動詞に対応する尊敬語を正しく使用できるかを試す問題である。

解答者全体の正答率は一問目 76.2%、二問目 66.3%、三問目 52.5%となっており、十分な理解があるとは言いがたい。学科別に見ると工学部の正答率が低く、三問目については工学部の全学科で正答率が50%に満たない結果となった。問3については昨年度の日本語力テストでも同じ問題を出している。昨年度はすべての学科で50%以上の正答率が得られたが、今年度はそれを下回る結果となった。

特に正答率の低かった三問目は、「食べる」という動詞に対応する尊敬語を選ぶ問題である。正解は「召し上が(つ)て」であるが、「召し上が(ら)れ(て)」を選ぶ学生が少なかった。「召し上が(ら)れる」は尊敬語「召し上がる」に尊敬の助動詞が接続した形で、これも二重敬語であり、誤用である。

円滑なコミュニケーションを実現するためには敬語を適切に運用することが必要不可欠である。しかし、二重敬語など文意をとらなくても選択肢から削除されるべきものが多く選択されているというのが、本学学生の敬語理解の現状である。特

に、敬語を過剰に使用してしまうことが誤用につながっている点に注目し、今後も実践的な敬語指導を行う必要があることを指摘する。

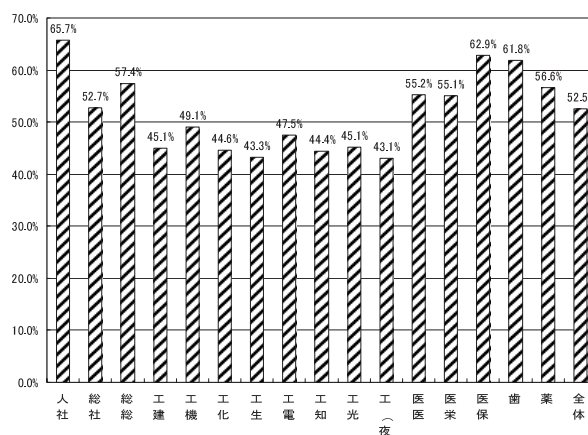


図7 問3-三の正答率

3-5. 問4 慣用表現

ここでは慣用的表現について分析する。全体的な正答率は 54.9%と六つの設問の中で最も低い。日常生活でこのような慣用表現を使用しない、または慣用表現自体は知っていても正しい意味を理解しないまま使用しているのだろうか。

項目ごとに見てみると、一問目「敷居が高い」の正答率が 25.5%と極端に低い。これは今回の日本語力テストの中でも最低の正答率である。②と解答した学生が54%を超えており、「敷居が高い」という言葉が「(格式高く思えて、品が高くて)気が進まない」という意味で捉えられているようである。「ハードルが高い」と混同している可能性もあるか。

続いて二問目の「わらにもすがる思い」だが、こちらは逆に正答率が 82.5%と高い。生物工学科、医学科、歯学部、薬学部は 90%を超えるほどである。その慣用表現の使用頻度、聞きなれている言葉かどうかは正答率に関わっているものと思われる。

三問目の「気が置けない」は、正答率 56.6%と半分程度であった。「気が置けない」の本来の意味は「気をつかったりする必要がなく、心から打ち解けることができる」といった意味であるが、現在は逆の意味で捉えられていることも多い。今回の結果にもそれが現れていると言えよう。

慣用表現についてまとめると、二問目の正答率から考えて慣用表現は日常生活で全く使用されないわけではないものの、言葉によっては意味を勘違いしたまま使われている場合があり、かつそれがかなり浸透しているものもあると思われる。会話の中で誤用した場合にも、「誤用していることを指摘されない」、「相手も意味を間違っ認識している」など、意味を間違っのまま使用し続けている可能性が高い。また「本来は自分の使い方が正しいのに、相手の使い方があまりにも堂々としているため自分が間違っしていると思ひ込み、誤っった使い方のほうを覚えなおしてしまう」というケースもあるかもしれない。

このような慣用表現は時代とともに、また地域によって意味が変化するものである。現在では誤用とされている言葉が、いつか正しい使い方として主流になっていく可能性もある。

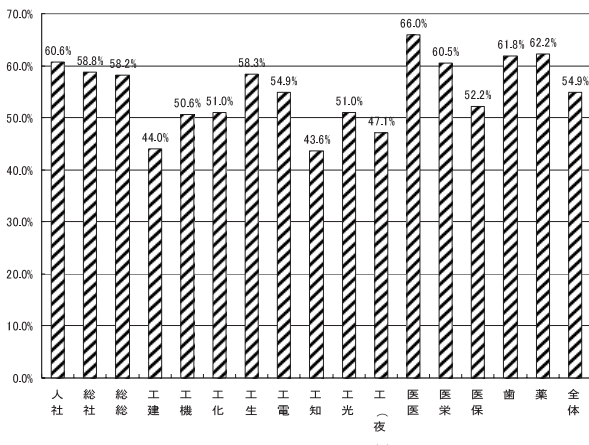


図8 問4の正答率

3-6. 問5 文意に即した適切な言葉

文意に即した適切な言葉を選択する問いである。全問の平均正答率は81.1%、各問の平均正答率は順に74.2%、81.6%、87.5%となった。

一は適切な熟語を選択させる問いで、パソコンの機能を携帯電話の機能と代える(替える)ことが可能であるという文意であるので、解答としては「代替」となる。誤答の多くが「代行」を答えるものだったが、「代行」は人が誰かの代わりに行うという意味であるので不適切である。パソコンの機能を携帯電話の機能で「代わりに行うことができる」と解釈したが、その主体については考えがおよばなかったことによる誤答か。問1でもみ

られた傾向であるが、漢字とその意味のつながりについての理解に乏しいようだ。

二は「のどくびを押さえる」という慣用句についての問いである。この問いはそれぞれの選択肢の語と「押さえる」という言葉の結びつきの強さをある程度把握できていれば解答できるので、文意はそれほど重要ではない。ほぼ均等に「手首」と「みぞおち」の誤答がみられる。「手首」は「押さえる」という行為と親和性が高かったのだろうか。「みぞおち」は文意から「急所」という意味を当てはめるのが妥当と考えて誤答してしまったのか。

三は十分に余裕があるという意味の「優に」を答えさせる問いである。正答率は高いが「余裕で」に誤答が集中しているのが特徴的だ。「存分に」は文意から当てはまらないと判断されたが、「余裕で」は意味としては通じて非常に口語的で、広く認められているとは言えないという判定を比較的下しくかったのだろう。誤答の傾向も昨年度と同様である。

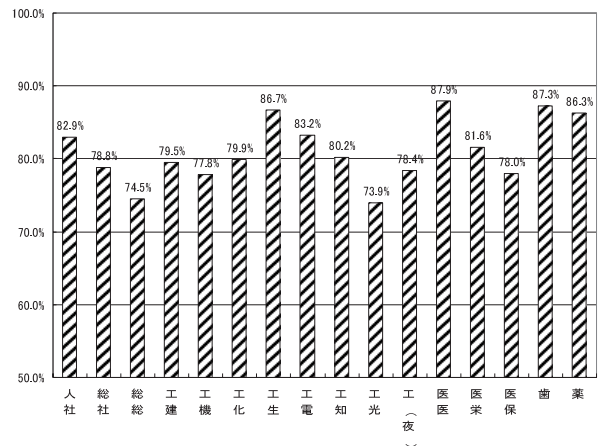


図9 問5の正答率

3-7. 問6 慣用表現

この項目では特定の動詞と結びついて用いられる言葉を取り上げた。それぞれに続く動詞とその全体の意味を問う形になっている。問題によって正答率にばらつきが見られるため、ここでは正答率とともに、どのような誤答があったかを重点的にみていく。

一問目の「物議を醸す」では正答率は61.5%。「醸す」の部分「交わす」、次いで「振るう」とする

解答が多かった。「交わす」に関しては「醸す」との韻の類似性から間違える可能性もあると思われる。「振るう」については、「熱弁を振るう」と勘違いしたのだろうか。

二問目の「論戦を交わす」では正答率は78.9%。「交わす」の部分「張る」、次いで「振るう」とする解答が多かった。「張る」に関しては「論陣を張る」、「振るう」については上と同じ「熱弁を振るう」と勘違いしたのだろうか。

三問目の「弁明に努める」では正答率は90.0%。「努める」の部分「振るう」、次いで「付す」とする解答が多かった。上二つの問題でもそうだが、議論に関わる問題に対して「振るう」という誤答が出ている。助詞の「～に」に「振るう」がつくのは不自然なのだが、なぜ「振るう」を選択したのだろうか。正しい表現を知らない学生が、「言質」という字面から話す内容と推測し「熱弁を振るう」からとりあえず「振るう」にしておこう、と選んだ可能性もある。

四問目の「言質を取る」では正答率は46.0%。正答率が半分を切っている。誤答としては「振るう」、「張る」が多く、次いで「囲む」、「畳む」、「醸す」、「預ける」という解答が多かった。

「振るう」、「張る」に至っては誤答数が三桁を超え、以下のそれぞれも70～100と、誤答の中にもかなりのばらつきがある。これはそもそも「言質」という言葉を知らない、または読めなかったため、推測できなかつたりその後続く動詞の違和感に気付けないままそれらしいものを適当に選択した可能性が考えられる。

五問目の「不問に付す」では正答率は48.7%とこちらも正答率が半分を切っている。「付す」の部分「預ける」とする解答が最も多く、次いで「畳む」とする解答が多かった。「不問」という単語から「問題にしない、問いたさない」という意味を想像し、そこから「問題の決着をつけない、持ち越す」という思考の流れで「勝負を預ける」の「預ける」を選択したのだろうか。

意味を問う問題に関しては、問題によって正答率に大きな差が出るようなこともなく、全体的に正答率は高かった。その理由として考えられるのが、文意からある程度意味を予測可能だったこと、

上の動詞の問題のように正解にならない選択肢がなく、消去法で答えを選択することができたこと、の二点であろう。その点から考えると解答しやすい問題だったのではないだろうか。

一問目で多かった誤答は「異なる考えを持つ者がそれぞれの立場から論じ合うこと」であり、二問目で多かった誤答が「世間の議論や批判を引き起こすこと」である。どちらにも「物議」「論戦」という議論に関係する単語が含まれているため、文意をとれば五つの選択肢から上の二つの選択肢まで絞り込むことは容易であったろう。

三問目で多かった誤答は「証拠となる言葉を得ておくこと」であった。誤答者は、問題の「誤解を解くため」という部分に注目しすぎたためこの選択肢を選択したのではないだろうか。

四問目は誤答にばらつきがあり極端に多い誤答というものは見られなかった。あえて言えば「取り立てて問題にしないこと」と「やむをえない理由などがあつたことを説明すること」が多かったが、このようなばらつきが出たのには、やはり「言質」という単語の理解度が関わっていると考えられよう。

五問目で多かった誤答は「証拠となる言葉を得ておくこと」であったが、五問目は正答率94%と最も高く、単純な誤答自体も少なかった。これはやはり「不問」という単語から「問題にしない」という意味を推測しやすかつたためであろう。

問6全体でみると、正答率は77.6%であった。意味を答えるほうの問題の正答率の高さが数字を大きく引き上げていると考えて間違いはないだろう。問6での正答率が高くないのには、単純な言葉の理解度に加え、解答者が今まで会話をしてきた相手などが大きく関わっているのではないだろうか。日常生活でこのような表現をする必要がなかつた、知る必要がなかつたことが、この結果につながつたものと思われる。

4. テスト結果のまとめ

問1は、異字同訓の漢字についての問題であった。全体的に言えば低くはない正答率であったが、学科によっては70%に満たない、もしくは超えても70%に近いところもあり、字義の把握や使い分

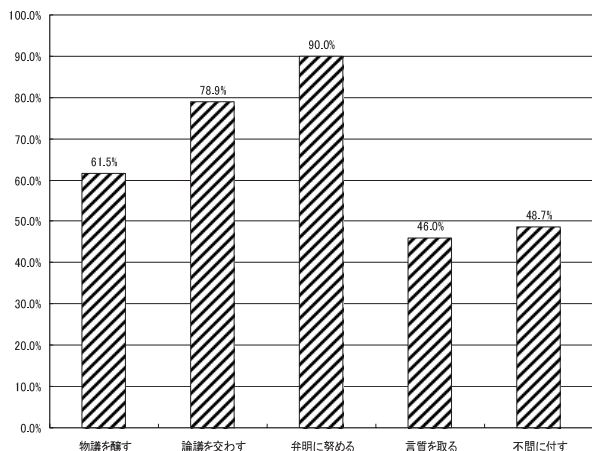


図10 問6 (動詞) の正答率

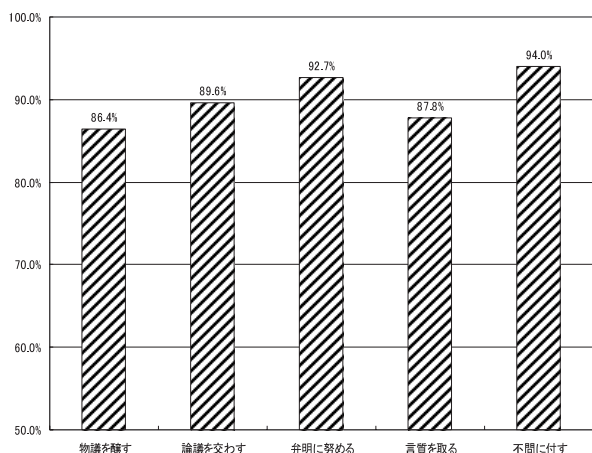


図11 問6 (意味) の正答率

けに関しては不安の残る点である。

問2、問3は共に敬語に関する設問である。ここでみられた傾向は、二重敬語、過剰敬語の誤用である。これらは文法的に言えば間違いであることは明白であるのだが、この誤用の多さは無視できない。社会的に、従来の敬語用法に対して、敬意遜減の意識が働いているのかもしれない。いわゆる普通の敬語の言い方では、今となっては敬意を感じられない、もしくは失礼なのではないだろうか、と感ぜられるようになってきている可能性は大いにあるように思う。

問4、問6は共に慣用表現に関する問題で、どちらも概ね昨年度の結果と同様であった。慣用表現に関する問題には、誤答が集中しやすい。誤答が集中するということは、それだけその用法が浸透している可能性も示唆するとともに、これらの

慣用表現を日常的に用いていない、それどころかこれらの表現を知っているかどうかにも疑問を抱かずにはいられない。現代日本語における意味を正しく捉えられていないのは、おそらく読書量の減少と無関係ではないだろう。

問5は文意に即した適切な言葉を選択する問題であった。この設問では、熟語など一般的な語彙の理解の程度を知ることができる。昨年と大きく変化するところはなく、同じ漢字を含む熟語の使い分けは今回も正答率は低かった。

前年度の全体正答率は73.8%、今年度は73.6%と、学年間に特に差があるとは言えない。学科別にそれぞれの平均正答率をみると、最も正答率の高かった学科と低かった学科の差は17.1%であり、昨年の19%に比べ学年内における理解度等の差は縮まっている。しかしながら、本テストが問題作成に利用した東京書籍『日本語検定3級』(2007)における合格ラインは目安として70%以上を設定しているが、70%未満の学科が昨年よりも多い6学科となってしまっている。本テストのレベルを考えると、これは看過すべきではない。

テスト全体の正答率を学科別に順位で並べてみると、前年度と上位五学科には変化はない(ただし、人間文化学科を人間社会学科に相当するとみなす)。気になるのは今年度より創設された総合理数学科で、総合科学部の中でも、日本語力に関しては高くはないと言わざるをえない。前年度における自然システム学科に相当する学科としてみた場合、順位も大きく落ちている。理系に属する学科であっても、日々のコミュニケーション、また論文の執筆等に日本語の運用能力が不可欠なのは、言うまでもない。本学の日本語に関する教育を、再検討する必要があるだろう。

今回と前回のテストで大きく異なるのは、本学総合科学部における学部の改組に伴い、学科やその総数が変わってしまったことである。そのため新たな総合科学部は、前年度との単純な比較はし難いという現実があった。来年度以降のテストとの比較に期待したい。

5. 他大学の実情聞き取り調査の報告

小野博ほか(2005)の全国の大学生を対象にし

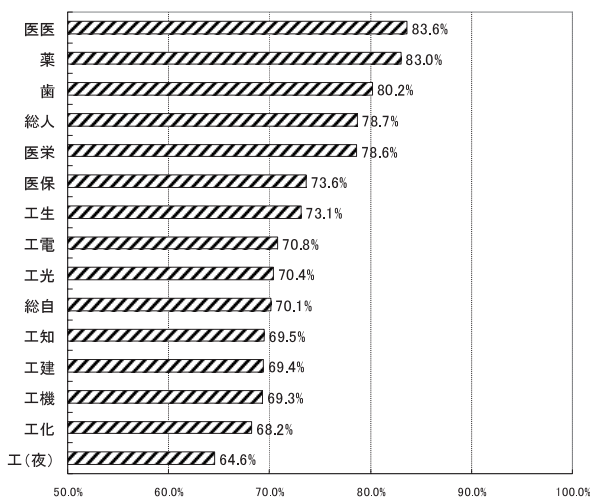


図 12 2008 年学科別正答率

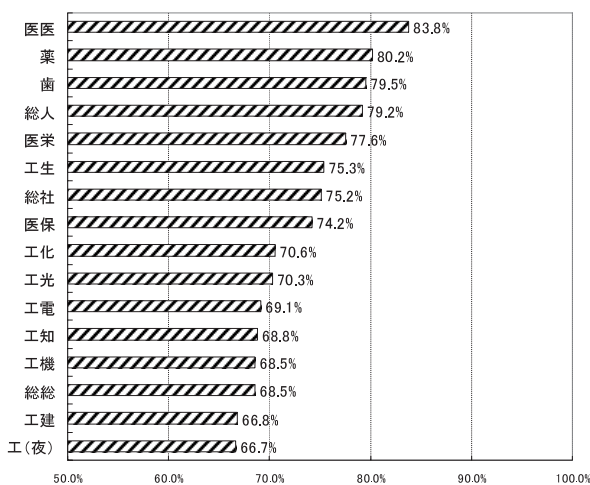


図 13 2009 年学科別正答率

た基礎学力に関する調査報告の中には、学生の日本語力に関する実態も報告されている。本誌前号における報告の「はじめに」でも示唆されている通り、本テストはこの報告に刺激を受けて始められた面もあるわけで、他大学の学生の日本語力は当然気に掛かることである。

そこで今回、二つの大学の教員一名ずつに面会し、それぞれが受け持っている学生の日本語運用能力や指導法について話を聞き、本テストひいては本学における学生の日本語運用能力の向上の方策をたてるにあたっての参考にしようと考えた。ところで、本テストの内容は基本的な語彙・漢字・敬語等の知識を問うものと今のところはなっているが、将来的には、日本語運用能力全般の指導、

具体的には学生の文章力の向上を中心的に目指したものである。今回の聞き取り調査はその点を見据えて、主として文章作成指導について聞いたもので、この結果を本学における将来の指導法の確立に資したい。

それにしても、本来このような調査はある程度以上の規模でもって行い、全体的な分析をしないと、特殊個別な事情を把握しただけに終わる恐れのあるものである。しかし、今回は予算や時間も限られている中、とりあえず二名からじっくり実態を聞くこととした。後に述べていくように、それでも十分に参考になったものと思っている。

ここでは、二名から聴取できた実態と、それをもとに、本学においても参考になるであろうと思われる点の概略を報告する。

5-1. 聞き取り対象の選定

まず対象の選定だが、首都圏の大規模校の教員とした。首都圏の大規模校だと、全国各地から多様な学生が集まっている可能性が高く、全体的な傾向に少しでも近い実態が窺えると考えたからである。

二名のうち一名は、ある私立大学の理科系学部 of 教養課程で作文や小論文の授業を担当している教員を選んだ（以後 A 大学某学部の a 講師とする）。一般的に理科系の学生は文科系の学生よりも日本語運用能力が劣ると考えられるので、それを実際に指導している a 講師から話を聞くことは、全体的な問題を浮き彫りにする上で有効であると予想したものである。

もう一名は別の私立大学の文学部に属し文科系学部の学生を指導している教員を選んだ（以後 B 大学の b 准教授とする）。a 講師とは逆に、もともと日本語運用能力に長けているはずの文学部乃至は文科系学部の学生を指導している教員を選んだものである。大学生の日本語運用能力が全体的に低下している中、たとえ文学部の学生であっても十分な力を備えているとは限らず、指導にあたってはそれなりの苦労や工夫があるはずで、そこから本学の学生を指導していくにあたっての留意点も見いだせると考えたものである。

5-2. 理科系学部教員からの聞き取り

では、A大学某学部のa講師より順次報告していく。

最初に問題点として指摘された点を、顕著な例を中心に挙げておく。

全体的な問題としては、年々レベルが低下していくことがやはりある。例えば、かつては演繹的な文章と帰納的な文章を区別して書く段階から指導を始められたのだが、今はそれは無理で、まずは演繹と帰納を理解させる必要がある。しかし、その理解もなかなか困難で、何か簡単な課題を与えて課題に沿って書かせるところから始めているのが現況である。課題を与えないで自由に書かせると、何を書いているかわからない学生が多い。しかし、課題の量は少なくしておかないといけない学生が多くなった。

個別の問題でもっとも目立つのは、接続詞の使い方がまったくと言ってよいほどできていない点である。換言すれば一文一文を論理的に繋いでいくことができていない。順接で繋ぐべき所を逆接にしたりしてしまう。それと関連して、文頭文末表現が呼応していなかったり、一文の中で前後違う事柄が書いてあったりすることもざらである。要するに文がねじれているのだが、そもそもどんな文がねじれている文かということからして理解できていないようである。

「です・ます」調・「である」調という基本的なことも理解できていない学生が多い。場合によってどちらかに統一しなければならないのは分かっているのだが、例えば「である」調で書く場合、すべての文が「のである」で終わっている文章なども散見されるのである。

語彙量の低下も著しい。難しい言葉はほとんど出でず、出てきた場合は、何かからの引用である場合にほぼ限られる。

その引用もうまくできていない。そもそも引用のルールからして知らないのだが、加えて、他人の文章を引き写してくることと、自分で自分の考えを文章化することの区別もできていない学生も少なくない。

次に、本テストでも懸案として浮かび上がってきた問題と通ずる問題として、敬語が挙げられた。

敬語を使って文章を書かせることは手紙と電子メールの書き方を少し教えているだけなので主として会話での現象だが、学生たちが使うのは丁寧語だけで、尊敬語・謙譲語を使うことはまずない。第一に尊敬語・謙譲語とは何か、どの語が尊敬語・謙譲語かということすら知らないようである。

a講師は他にもいくつか問題点を指摘したが、主な点は以上の通りであり、次にa講師が指導上留意している点を報告しておく。上に挙げたような個々の問題については問題ごとに策を講じているのは当然として、a講師が特に強調していた全体的な留意点で、今後本学においても参考にしなければならないであろうと思われる点を主として書いておく。

まずは一文を短くして、原則として一文に一つの事柄を書く段階から指導していかなくてはならないとのことである。すると、前述の接続詞の問題が出てくるのであるが、とにかくこのような書き方から始める必要がある。

さらにそこからレベルを上げていかなければならないのだが、問題はそれの際の個々の専門分野による文章の書き方の違いである。それぞれの学生は自分が進む専門分野に相応しい文章の書き方を将来的には身につけなければならないわけだが、上に書いたような基本的レベル（あるいは、基本的より以前のレベル）から始めるためには、日本語学や日本文学を専門とする教員が指導にあたることになってこよう。そして、専門分野に進んだ時に、それぞれの専門の教員が文章の指導にもあたることになるであろう。その際、日本語学や日本文学を専門とする教員と専門分野の教員との連携が大切とのことである。

次に、一度に指導する学生数（授業で言えば、受講生の数）が問題で、言うまでもないが少人数でないと成り立たない。指導は勿論添削を伴わなければ効果を期待できない。そのみならず、基準を示して点数を付けることまでしないと向上の動機付けが難しい。その他にも、先に挙げた例で言えば、文のねじれや接続詞の使い方など、そもそも理解できていない基本的な事柄を講義形式で説明する際にも、指名して問題に答えさせながら進めなければ効果が上がらない。このように、少人

数指導が必須の条件であるのは、単に添削の必要性からだけではないことが指摘された。

また、文章を書かせる前に、多くの文章を読ませる必要がある。上に挙げたような問題はすべて文章を読む量が少ないことから生じているとも言える。例えば文のねじれとはどういうことをいうのか分かっていないのも、日頃他人の文章を読んで、ここは文がねじれているなどと感じたりしないからだと言えるのである。

5-3. 理科系学部の問題により本学の課題を考える

このような a 講師の指摘を踏まえて本学での問題として考えれば、基本的レベルから指導していく体制がとれていないことが何よりの問題で、課題となろう。それは、本学の実態は A 大学某学部ほどにはまだ至っていないからだとも言えるのであるが、そもそも本テストを開始したのも、このままではいずれそのような状況に近づくのではないかという懸念からである。正直に言うと、A 大学某学部のような状況になっているのは、初等中等教育での作文指導が行き届いていないからだと思筆者は思っているが、そのような現状を踏まえれば、本学でも、またいずれの大学においても A 大学某学部のような状況に近づいていくことが予想されるのではないかと。

ここで、a 講師の話聞いて筆者自身が総合科学部も含めて本学で指導していて感じる点との共通点を指摘しておきたい。まず、先にも触れたことだが、昨年度・今年度の本テストの結果を見て分かる通り、敬語の運用能力の低下が見られる。接続詞の運用力のなさも筆者が日頃から感じている問題である。多くの学生はそもそも接続詞で文を繋ぎながら文章を構成していく必要を感じていないようである。論が展開する所でも繋ぎの言葉なしに続けていくのである。これはおそらく、自分の書いた文章を他人が読んで理解できるようにという意識が薄いからで、自分の考えを言わば裸のまま投げ出せばそれを読み取って評価してくれると思っているようである。引用の問題も共通点を感じた。筆者は、全学共通教育の教養科目においては、引用どころか、文献を見ずに授業の内

容を文章に纏めさせる段階から指導しようとしており、レポートの課題を出す際、他の文献を見ないように指示している。それにも拘わらず、他人の文章を丸写しに近い形で引いてくる学生が散見されるのである。同じようなことは、長くなるので具体的には書かないが、総合科学部学部での講義あるいは基礎ゼミナールにおいても指摘できる。これは、筆者だけが感じる特殊な事態ではないであろう。

以上のことよりして、本学においても、基本的な文章力指導の体制づくりが急がれると考える。

その際、当初より専門分野の教員との連携を視野に入れた体制づくりが望ましいであろう。専門分野の教員がどのような日本語運用能力向上の指導が行われているか知らない、あるいは、それには係わらないというのではいかにも効率が悪い。連携のあり方を今ここで具体的に提示することはできないが、いずれにせよ、連携の必要性は a 講師の指摘する通りであると考えられる。

指導体制においても一つの大きな問題は、少人数指導体制が確立できるかどうかである。先に、基本的なところの指導は日本語学や日本文学を専門とする者が担当することになると書いたが、本学の現状ではそれは不可能なことは言を俟たない。他の文科系の教員を動員しても同じようなものであろう。多くの私立大学で行われているように非常勤を動員するとか、a 講師を採用している A 大学某学部のように、理科系の学部にあたる専任の教員をおくとかの手当も必要となつてこよう。

こんな中、読書量を増やす課題には比較的早くに手を付けられるのではなかろうか。現在既に 4 号館の学生支援室にはかなりの数の新書等が配置され、3 号館の学習支援室とも併せて助教による読書指導が行われている。学生支援室では月 1 回の読書会や解説会等も企画されている。このように学生の読書欲をかき立てようとする配慮は既になされているのだが、まだまだ不十分で、さらなる方策を立てる必要がある。いずれにせよ、教員あるいは読書に興味のある学生が知恵を出し合えば、難しくないのではないかと。

5-4. 文学部教員からの聞き取り

次にB大学のb准教授の話である。

最初に文科系学部の学生を対象にした一般教養での文章力指導のことを聞いたのだが、a講師の話と重なる面が多かったは興味深かった。例えば、最初に指摘されたのが文がねじれていても気がつかず、よって、論理立てた文書を書けない学生が多いことである。その他では、漢字の力も落ちているし、語彙の面でも稀に難しい言葉があったかと思うと中国史を題材にしたゲームで覚えたということだったりする。そんな状況だから、読書量も極端に減っていて、高等学校の教科書以来まともに本を読んでいないとか、夏休みの課題としなると本を一冊も読まないとかの学生も多く見受けられる。

続いてb准教授が専門として指導する日本文学専攻の学生についての話を聞いた。多様な学生の中でも、元来日本語運用能力に長けているはずの学生であるが、それでも「大学での国語力」をテーマにした授業を1年次の必修にして指導を始める必要がある程に日本語運用能力には問題あるとのことである。

では、B大学文学部ではどのような対策をとっているのか。これも、本学においても参考のできるであろうと思われる全般的なことだけ書いておく。

この「大学での国語力」をテーマにした授業の件だが、大規模な私学であるから学生数も多い中、やはり少人数にクラス分けしないと授業は成り立たない。授業担当者数を鑑みながらなるべく少人数にしてクラス分けしてできたクラスを、かつては前後期に分けてそれで全員1年次必修にしていた。少ない授業担当者で時間割を組む為である。ところが、前期で修得する学生は高校生のような態度で授業にのぞむのでよいのであるが、夏休みを挟んだ後期の学生はこのような基礎的な授業に興味を示さなくなる傾向がある。それで、工夫してこの授業を前期に固めたそうである。4年間(または、6年間)かけてじっくり日本語運用能力を涵養していくことと併せ、そのためにも1年次前期から基本的な力は修得させておく必要があるようだ。

5-5. 文学部の問題により本学の課題を考える

A大学某学部の現状は余所事ではなく、いずれ本学も他大学も同様の状態に近づく可能性が高いというようなことを先程書いたが、b准教授の話を聞いてますますその思いを強くした。

それは一つには、一般教養における文科系の学生であっても、A大学某学部の学生と同じような傾向を示しているからである。もう一つには、文学部で1年次からの指導の必要性が認識されたのは、卒業論文における文章力の低下が著しいからであると聞いたからである。つまり、卒業段階に至っても、卒論レベルの文章力が身につけていないということである。文学部においてもこのような状況であるからには、B大学のその他文科系学部あるいはA大学某学部の現況と照らし合わせれば、学生の日本語運用能力は、予想以上のスピードで低下していくと覚悟しなければならないであろう。

よって、本学においても1年次からの指導が必要となってくるであろうが、その際、B大学文学部が、1年次前期から始めるように変更したことは参考になろう。端的に言い換えると、本学でも理科系の科目では実施されている高大接続科目のような扱いで指導をする必要が出てくると思うのである。そして、ゆくゆくは必修とせざる得なくなるかもしれない。そうすると、繰り返しになるが、B大学文学部同様担当教員の数が問題となってくる。ちなみにB大学文学部では、専任だけでは足りないので、兼任の教員もこの授業を担当しているとのことである。

5-6. おわりに

今回は二大学の二教員の話^{はなし}しか聞く余裕がなかったのだが、最初にも述べた通り、それでもかなり全般的な傾向はうかがい知れ、参考になった、いや、参考にしなければならぬことが聞けたと思っっている。少なくとも、これら二大学の現状を本学から見て、余所事だとして済ませられないことだけは確かである。

最後になったが、貴重な時間を割いて貴重な話を聞かせて下さったa講師とb准教授に御礼申し

上げたい。なお、この5章については文責・堤和博が担当した。

【参考資料】

小野博ほか「日本の大学生の基礎学力構造とリメディア教育」NIME 研究報告 独立行政法人メディア教育開発センター, 2005

<http://www.nime.ac.jp/journal/05-6.pdf>

岸江信介・仙波光明・堤和博・清水勇吉「日本語運用能力の向上をめざして-日本語力テストの実施-」『大学教育研究ジャーナル』第6号 pp. 75-84, 徳島大学, 2009

日本語能力検定問題抜粋

問1 各文の——部分の言葉を漢字を使って書くと、【 】内のどちらの漢字を用いるのが適切でしょうか。番号で教えてください。

一【①荒 ②粗】

- ア 彼は、昔から金遣いのあらい男だった。
- イ ずいぶん人使いのあらい上司だ。
- ウ 細部の詰めができておらず、スケジュールの組み方があらい。

二【①慎 ②謹】

- ア 体のこともお考えになり、酒を少しつつしまれてはいかがですか。
- イ つつしんで、お祝いの言葉を申し上げます。
- ウ 言葉をつつしみなさいと注意された。

問2 高校時代のクラス会が開催され、当時の担任だった先生が出席しました。クラス会の幹事が、先生にお礼の手紙として、次のような文章(頭語・結語・後付けなどは省略)を書きました。()に入る表現として最も適切なものを選んで、番号で教えてください。

紅葉の便りが届く季節、先生にはまもなく喜寿をお迎えになると (**ア**)、まことにおめでとうございます。

先日は、私ども三年一組のクラス会にご出席くださいまして、ありがとうございました。先生が (**イ**) と知らせましたもので、先生も (**ウ**) とおり、三年一組は四十八名でしたが、四十二名もの諸君が出席してくれまして、幹事一同、本当にうれしく思っております。先生が、「出席をとる」と (**エ**) て、旧姓で点呼を (**オ**) ましたが、タイムスリップしたようで、とても懐かしくなりました。次の機会にもお目にかかれまして、楽しみにしております。

- ア**……① お聞きになって ② 傾聴し ③ 伺い ④ お耳に入れ
- イ**……① ご出席になられる ② ご出席くださる ③ ご出席される ④ 出席いたす
- ウ**……① 知っている ② 存じておられる ③ 存じ上げている ④ ご存じの
- エ**……① 申し上げ ② おっしゃっ ③ おっしゃられ ④ 言われ
- オ**……① なさい ② 呼ばれ ③ いたし ④ いたされ

問3 一～三の文の——部分を敬語を使って言おうとするとき、どのような言い方が適切でしょうか。適切なものを一つ選んで、番号で教えてください。

- 一 Tシャツのサイズは、Sにしますか。
[①いたし ②いたされ ③なさい ④なさられ]
- 二 先生、ホームルームのとき先生が言った大学の説明会のことで、ご相談したいのですが。
[①おっしゃられ ②おっしゃっ ③申され ④お話しし]
- 三 もう少し料理を食べてはいかがですか。
[①いただかれて ②いただい ③召し上がられ ④召し上がっ]

問4 それぞれの見出しに掲げた言い方を本来の意味で使っているのはどの文でしょうか。一つ選んで、番号で教えてください。

一【敷居が高い】

- ①借金をしたままの伯父のところへ挨拶に行くのは敷居が高い。
- ②オペラを楽しんでみたいという気持ちはあるが、劇場へ行くのは敷居が高い。

③県下でベストエイトを目指すとなると、これは少々敷居が高い。

二【わらにもすがる思い】

- ①報告書の提出期限に間に合いそうもないので、わらにもすがる思いで課長に手助けをお願いに参りました。
- ②夫の行方が知れず困り果てたわたしは、わらにもすがる思いで、占い師のもとを訪ねた。
- ③この間、お互いわらにもすがる思いで協力し合ってきたわけだし、これからもよろしく頼むよ。

三【気が置けない】

- ①大山部長は大学の先輩だし、気が置けない関係じゃないのだから、相談してみたらどうかな。
- ②あいつは腹の中で何を考えているのか分からない男で、全く気が置けない。
- ③岸田君とは小学校以来の付き合いで、今でも気が置けない間柄なんです。

問5 一～三の文の()に入る言葉として適切なものを一つ選んで、番号で答えてください。

- 一 パソコンの機能は、携帯電話でもおおむね()可能になった。
[①代置 ②代行 ③代替]
- 二 派内の最大グループの票が確実となれば、相手陣営の()を押さえたも同然だ。
[①手首 ②のどくび ③みぞおち]
- 三 ベンチャー企業を起こしたこの女性によれば、月に三百万円は()稼ぐという。
[①余裕で ②存分に ③優に]

問6 一～五の太字で表した言葉は、特定の動詞と結び付いて用いられることが多いものです。結び付く動詞を選んで、①～⑩の番号で答えてください。一つの動詞は、一回しか使えないこととします。また、特定の動詞と結び付いた——部分の言い方が表す意味を、⑪～⑮の番号で答えてください。

- 一 何かと**物議**を_____
- 二 与党と**論戦**を_____
- 三 誤解を解くため**弁明**に_____
- 四 交渉の中で**言質**を_____
- 五 過去は**不問**に_____

- ①努める ②畳む ③交わす ④振るう
- ⑤囲む ⑥取る ⑦醸す ⑧預ける
- ⑨張る ⑩付す

- ⑪やむをえない理由などがあつたことを説明すること
- ⑫異なる考えを持つ者がそれぞれの立場から論じ合うこと
- ⑬世間の議論や批判を引き起こすこと
- ⑭取り立てて問題にしないこと
- ⑮証拠になる言葉を得ておくこと